

典型的な乙女ゲームだ
と思ったら、典型的な
BLゲームに転生してし
まった悪役令嬢の話

北十五条東一丁目

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

迫り来るイケメンどもから婚約者の王子を守る、悪役令嬢のストーリー。

某所に上げた短編を連載化。そんなにネタはないから短くまとめます。

もう一つの連載優先なので不定期。

目次

ねえ、俺の玩具になつてよ。	1
お前がこんな、いやらしい肢体をしてる	
から悪い。	8
じゃあ、王子は今日から、俺の奴隷ですか	
らね。	16
鬼畜度MAX	25
中年庭師×貴公子	32

ねえ、俺の玩具になってよ。

16歳の誕生日、公爵令嬢のロザリアは、突然前世の記憶を取り戻した。どうやらこの世界は、現代日本で平凡なOLだった自分が、生前好きだった乙女ゲームの世界とそっくりそのままらしい。

——でも、どのゲームだったかしら？

コアなゲーマーだった私は、何百本と同じようなタイトルを遊び尽くしていた。そのせいかも知れないし、転生による記憶の混乱のせいかも知れない。ともかくいまいち、この世界がどのゲームに基づくものか思い出せなかった。

かろうじて思い出せるのは、自分——ロザリアが典型的な悪役令嬢だったということだけだ。婚約者である王子をライバルに奪われて、惨めに敗北する役どころ——それだけは覚えている。

「……それだけはさせませんわ!!」

拳を握り締めて吼えてみる。8歳の時に婚約したクリス王子は、前世の記憶を取り戻す前のロザリア——気が強くてわがままで、意地悪ばかり言う少女に対しても、いつも優しく接してくれた。自分が今まで行ってきた意地悪も、王子に対する子どもっぽい愛

情の裏返しなのだということも、今のロザリアには自覚できる。

前世の記憶が蘇った今でも、自分の王子に対する気持ちは変わらない。ぼつと出のヒロインに、横から彼を搔っさらわれるなんて我慢できない。今までの行いを改め、己を磨き、まだ見ぬライバルの出現に備えなければならない。

ストーリーや自分と王子以外のキャラクターが思い出せないのが若干不安だが、自分のどのゲームマーならば、少々捻くれたフラグでも、初見で見抜いて攻略してみせる。

そして目指すは王子とのハッピーエンド――

「……急にどうしたんだい？ ロザリイ」

「――……はっ！ な、何でもありませんわ！」

おっとしまった。そう言えば今は、自分の誕生パーティーの真つ最中だった。傍に立っているクリス王子が怪訝な顔を向けてくる。引きつった笑顔でごまかした。

「大丈夫？ 様子が変だよ？ 水でも取ってくるから――」

そう言っつてクリス王子は自分の傍から離れていく。王子は本当に優しい。彼を失わないためにも、何とかライバルのヒロインの名前くらいは思い出したいところだが……

「うわ!!」

「も、申し訳ありません王子！ 大丈夫ですか？」

——ん？ なんですかの？

大きな物音がして、そちらに目を向けた。

同じ年くらいの子の黒髪の男の子とぶつかった王子が尻餅をつき、グラスの水を頭から被っている。

——うわ、あの男の子も王子と同じくらい美形だわ。ふうむ、察するにあれもヒロインの攻略対象……あれ？

「申し訳ありません。王子に対してとんだ粗相を——」

「いいんだ。私が不注意だった。君は？」

「俺——いえ、私はアヴィンと申します。……ユベール伯爵の息子です」

あれあれあれ？

黒髪の美青年の鋭い眼が、王子の濡れた上半身を凝視している。王子の前髪から滴り落ちる水滴に、身体に張り付いたシャツ。青年がごくりと唾を飲む。それを見つめる瞳には、明らかに強い情欲の光が宿り——っておい。

ロザリアの頭に電光が走り、再び前世の記憶が蘇る。

この世界の元となったゲームのタイトルは——

『狙われた王子〜ねえ、俺の玩具になってよ〜』

——……すなわち、18禁のBLゲームだ。



「なんなのよもう！ 最初っからヒロインなんていないんじゃない!!」

ロザリアはベッドに枕を投げて当り散らす。何という誤算だ。てつきり典型的な乙女ゲームの世界だと思っていたが、典型的なBLゲームの間違いだったとは。

このゲームにおいて、クリス王子は確かに攻略対象だが、同時に主人公で、ヒロインでもある……訳が分からない。まあ要するに、私のライバルキャラは皆男で、皆王子を狙っているのだ。性的に。

パーティーの席で王子にぶつかっただのはメインキャラクターの一人だ。鬼畜キャラで、王子の濡れた身体に得体の知れない初めての感情を抱いた彼は、婚約者から王子を寝取るために——。ん？ その婚約者って私か。ハハっ、酷いなこりゃ。

「BLものなら初めから女キャラなんか出さないでよ……」

両手で顔を覆って嘆く。完全なる自己否定だが、無理も無いと思う。

このゲームのコンセプトは、いわゆる「寝取り」だ。王子を婚約者から奪い取る。元居た世界には、そういうのに興奮するぜ！ という層が根強いのだ。今は滅びてしまえと切に願う。——え？ お前もこのゲームやってたろって？ ……………てへ！

とにかく自分は、そのニツチな需要を満たすためだけに用意されたキャラクター。す

なわちおまけというか、ただのギミックだ。

——道理でこの国の男女比が9：1くらいな訳だわ。おかしいと思った。

あのイベントは王子と黒髪の出会いイベントだ。この休暇が明けると新学期。そこで王子と再会した奴は、王子を墮とすためにあらゆる手練手管を仕掛けてくる。最早一刻の猶予もなるまい。

奴を王子から遠ざけるための策を練り始めると、ノックの音が響いた。入ってきたのはロザリアの兄のラインハルトだ。

いかにも腹に一物抱えていそうな優等生風の超美形が、涼やかな微笑で尋ねた。

「どうしたんだいロザリア。帰ってきてからずっと機嫌が悪いが……。良かったら、私に何があったのか話してみなさい。——か、顔が怖いよ？ ロザリア」

きつとお兄様をにらみつける。実はこの男、我が実兄もメインキャラクターの一人だ。学園の先輩でもある兄は、やがて妹の婚約者である王子を愛するという背徳の感情に呑み込まれていくのだ。

「お兄様がそんな人だとは思いませんでした!!!」

「ええ!!」

「私の婚約者であると知りながら——しかも同性である王子に手を出すなんて!!」

「ええ!!? ど、どうしてそういう事になってるんだ!!? わ、私にそういう趣味はないぞ

!？」

「今は違っても、これからそうなるのです!!」

「何その断言! 妹の中で、私はどういう人間になっているの!」

「あまつさえ、妹の結婚式の最中に、王子を手籠めにするなんて!!」

「若い娘が手籠めなんて言わない!! そもそもお前たちはまだ結婚してないだろう!」

否定するお兄様、だが私には分かっているのだ。

「隣の控え室で妹がウエディングドレスに着替えているというのに『俺の花嫁はクリス王子だよ……』とか言いながら王子の白い肌をまさぐり『ここではやめてください先輩、隣にロザリイが……』という王子の懇願にも関わらず、『ふふふ、言葉で嫌がっても、君のここはそう言っていないよ』と下腹部に手を這わせてさらに情欲に満ちた荒々しい動きで王子の濡れた唇を塞——」

「ストップストップ!! 真顔で何言ってるんだよ!! 怖いよ!!」

「でもお兄様、王子のこと、ちよつといいなって思ってたりましたせん?」

「ああ、たまにこいついい身体してるなあつて——思っていない!!!」

お兄様は混乱の極致にいるが、付き合っている暇は無い。出て行ってくださいと大声で叫んで、扉を閉めた。

これから自分は忙しいのだ。転生者としての知識をフル活用して、王子が墮とされる

エンディングを回避しなければならないのだから。

お前がこんな、いやらしい肢体をしてるから悪い。

新学期が始まった。ここからが本番だ。ゲームの期間は一年間。その間、迫り来る鬼畜どもから王子を守り抜かなければならない。

ところで別に、王子が墮とされたところで、私が殺されるとか、婚約破棄されるとか、没落するとかしなないとか、そういうことは全くもって無いのだが——いやだよ！ 婚約者をイケメンに奪われるなんて！

むしろまだ、断罪されて追放でもされる方がありがたい。どのルートに進もうが、たいてい私と王子は結婚する。ただしそのころには、既に王子の心と身体は別の男に奪われていて——なめるな！

唯一の救いは、ゲームが始まった時点では、王子はまだその道に目覚めていないということだ。彼はこれから数多のイケメンたちと出会い、調きよ——もとい、洗の——もとい、思考を作り変えられるのだ。ノンケが墮ちるから興奮するんだ。これは開発者の言葉でもある。もう一度言う、滅びろ。

——軽くホラーですわよね……。

数多あるエンディングの中で、自分が目指すのは唯一王子が誰にも攻略されないエン

ド。いわゆるバッドエンドだ。——人の幸せをバッド扱いするんじゃない!

いや、でも王子だつてその方が幸せですよ? 鬼畜系男子のペットになるよりも、私のペット——げふん。私と幸せな家庭を築く方がずっと良いに決まっています。

——いやまあね、本音を言うとき。私もBLゲームなんかやつてたわけだし? 美青年同士が愛し合うのは嫌いじゃない。決して嫌いじゃない。むしろ好物ですごめんなさい。でもね、お願いだからそれはどこかよそでやつて頂戴つてことよ!!

そんなことを考えているとはおくびにも出さず。優しい微笑を浮かべながら、机で考え事をしている王子に話しかける。

「クリス様、何を悩んでいらつしやるのですか?」

「ああ、ロザリイ。新学期の講義を何にしようかと思つてね。……このハドソン教授の薬草学なんかいいかも知れないな」

「んー、駄目です」

可愛く小首をかしげて、ロザリアが答える。

「え?」

「絶対に駄目です。その講義だけは取つてはいけません。非常につまらない上に、とても単位が取りづらいという噂です。それだけでなく、この講義を受けたせいで不幸になったという学生が何人も——」

「わ、分かった。君がそこまで言うなら取らないよ。……あれ？　でも変だな、ハドソン教授は新任の先生のはずなんだが……」

王子は首を捻っているが、これは仕方の無いことなのだ。薬草学のハドソン教授。この男もメインキャラクター、王子を狙う男の一人だ。

眼鏡をかけた柔和そうな顔をしているが、この男の手にかかると、王子は不思議な薬草の力によつて、こんなものやそんなものを、あんなところに入れて悦ぶ肉体に改造されてしまうのだ。都合のいい薬草もあつたものだけ。

「どうしたんだいロザリイ、三角フラスコなんか持つて」

「……はっ！　王子、これはお尻の中には入りませんからね！　いいですね！」

「当たり前じゃないか……」

「とにかく！　そんなものよりこの講義を一緒に受けませんか？　とつても面白そうですよ？」

「なになに……『実践保健体育く女性の肉体に感じるフェティシズムとエロチシズム』——なんでこんな講義があるんだ。『実践』って何するんだよ……」

「きつと王族として、大切なことだと思います」

隣に座ったロザリアが身体を寄せる。耳元で囁きながら、さりげなく胸の谷間をアピール。王子は咳払いをし、わざとらしく話題をそらした。

「ごほん。……とりあえず講義は後で考えよう。そう言えばロザリイ。ラインハルト先輩はどうしたんだい？ この間は会えなかったし、挨拶をしておきたいんだが」

「お兄様は隣国に留学しましたわ。来年まで帰ってきません」

突如真顔になったロザリアを見て、王子が焦る。

「そ、そうなのかい？ 突然だね」

「はい。思うところがあつたようです。外国で自分というものを見つめ直したいと。私も非常に寂しいのですが、兄のたつての希望で仕方なく。………留学から帰ってきたらお見合い三昧ですから、会つたとしても無駄ですよ？」

「無駄って何が？」

当然これは、ロザリアが父の公爵に手を回した結果だ。兄は目を白黒させていたが、別に留学もお見合いも悪いことではないし、可愛い妹のためだ。ここは涙を呑んでもらおう。

あ、そう言えばお父様も、非常に整つた顔立ちのロマンスグレーだ。念のため、後で王子に対する接近禁止命令を出しておくか。

とにかくロザリアとしては、立ちそうなフラグを未然に折り、王子に女性の素晴らしさを説いていかなければならないのだ。



「全寮制ってこれだから面倒ですわよね……」

そう言いながら、少し速足で中庭を歩く。この学園は全寮制で、当然だが男子寮と女子寮が分かれている。したがってロザリアは、常に王子に張り付いているということができない。時間割その他の都合で、こうして王子と別行動になつてしまう時間はどうしても生まれる。これは何か対策を考えないといけないだろう。

しかしそもそも、寮を男女に分けるといふことは、男女が寮であれやこれやをすることを防ぐ目的が大きいと思われる。

だがこの世界はBL世界だ。しかるに男女をませこぜにするよりも、男子をひと固まりにする方がはるかに危ないと考えるのは考えすぎだろうか。

寮の名前は男子が赤薔薇寮、女子は山田荘である。なぜ山田？ 女子の方のこの適当ぶりよ。開発陣が割いたリソースの差を感じさせる。そして男子は薔薇だ。赤薔薇――。そこに込められた意図は語るまでもないだろう。

公爵令嬢としての権力をフルに活用し、何とか薔薇の中に一輪の百合の花を咲かせるための算段をしながら、ロザリアは王子の元に向かった。

「……ん？」

そこで何か物音に気が付いた。音が響いてくるのは校舎裏だ。今のロザリアのように近道をしなければ、滅多に誰も通らない場所である。

「や、やめるんだ。どうして君はこんなことを……!」

愛しい愛しい王子の声がある。それを聞きつけ、ロザリアは秒間50メートルで音の発生源に向かった。

「はッ! —— どうしてだつて? 気に喰わねえからだよ」

「なっ」

「王子だからって、皆が下手に出ると思うなよ? 俺みたいなのがいるつてことを、テメエの甘つちよろい頭に叩き込んでやるよ。……そうだな、手始めに金だ

。王子なら、たんまり持つてるんだろ?」

セリフだけ聞けば、これはカツアゲの現場だ。不良が王子をいじめている図である。見れば校舎裏で、不良が王子を壁に追い詰め、行く手を塞ぐように壁に手をつけていた。いわゆる壁ドンである。定番だね。

しかし金を出せと言っておきながら、不良はそのあと、ジャンプしてみろとも何も言わない。まるで俺が探してやるぜと言わんばかりに、彼は王子の胸に手を這わせ、シャツの隙間から手を差し込んだ。王子、なぜこの状況で歯を食いしばって顔を赤らめるのですか。

「ちよおつとお待ちくださいさるっ!」

「うおっ!?!」

そこにロザリアが到着した。不良から見ると、まるで瞬間移動してきたとしか見えな
い怪しいムーブをして、にゅっと二人の間に割り込んだ。

「ロ、ロザリイ！ 君は下がっていてくれ！ この男は危険だ！」

そう、危険だ。ただし危険なのは、王子にとつてだけですよ。

「ちよつとこちらに来てくださいますか？ ……二人で話をしましょう」

「あ、ああ」

意外に素直な不良だ。彼はうなずくと、大人しくロザリアの後についてきた。

物陰に着くと、ロザリアは優しく、——おうてめえ何を考えとるんじや、人のモノに
手を出したらどうなるかわかつかとんのか、奥歯全部引っこ抜くぞ、とあくまで優しく彼
を諭した。まず言葉で説得する。王子を狙う相手とは言え、彼女の慈悲は海よりも深
い。

「聞いてますの？」

しかし不良はガタガタと震えだした。まるで子鹿のようである。まさかこの程度で
おびえたなんてことは無いだろうと思つて様子を見てみると、彼は自分の手を凝視しな
がら怖いことを言った。

「お、俺は今何を……？」

「はっ？」

「ち、違う。俺はただ、純粋にカツアゲしようと思ったただけなんだ！」

純粋なカツアゲ。それは一体何だろうか。

「で、でも、気が付いたら手が勝手に、手が勝手に王子のシャツに……！」

不良は涙目である。ロザリアは、お、おうと呻いた。

「違う！ 俺はそんなじゃないんだ！ なああんた！ 信じてくれ！」

完全に無意識の行為だったという。どうやら彼もこの世界の犠牲者らしい。

そのあとさらに詳しく事情を聴くと、勇敢にも一国の王子をカツアゲしようと思った不良の彼は、最初はそのつもりで王子を校舎裏に連れ込んだ。しかしどうしてか彼の意思に反して壁ドンすることになり、どうしてか彼の意思に反して王子の胸をまさぐった。要約するとそうなる。

世界がすべてを、BLに向かって修正しようとしている。ある種の人間にとっては理想郷だが、それ以外の人間にとっては地獄だ。この世界の強制力に逆らうのは、並大抵のことではないだろう。

さめざめと乙女のように泣く不良を前にして、ロザリアは覚悟を新たにした。

じゃあ、王子は今日から、俺の奴隷ですからね。

それにしても、王子はまるで男を誘う誘蛾灯だ。何か変なフェロモンでも出してるんじゃないだろうか。

とにかくその魅力に当てられて、学園の生徒から用務員、上は70歳の老人から、下は6歳の幼児まで、あらゆる男が王子を狙ってくる。

ロザリアはその男たちをちぎっては投げ、ちぎっては投げ、王子の貞操を守るために奮闘した。

——ああ、こういう行動がプレイヤーからはお邪魔虫に見えるのかなあ。ごめん、ゲームの中のロザリア。あなたの気持ちがよく分かったよ。

そんな感じでしみじみとした気分になったりしながらも、そうして何とか、ゲーム期間の一年が経過しようとしていた。

◇

ゲームの時間が終わるまであと少し。大体のフラグはへし折ったが、まだ王子を狙う

者は残っている。——今年の誕生日パーティーで会った、あの黒髪だ。

あの男はメインキャラの中でも更にメインを張っている存在だ。他のキャラと違い、2〜3本フラグを折ったくらいでは、そのイベントは止まらないらしい。

この一年間、王子が奴に密室に連れ込まれそうになること135回。およそ三日に一度のペースだ。そんなに王子をモノにしたいのか。その執念には頭が下がる。ロザリアと王子が一緒に出かける時だって、必ず奴が現れた。あれでは最早ストーリーカード。

王子もさすがだ。これだけされているのに、全く奴の気持ちに気付いていない。

「彼かい？　そう言えばよく会うよね」

ロザリアがイベントの進行を妨げているせいだろうが、王子にとってあの男はその程度の認識だ。

王子はロザリアが胸元を開いた服を着ようが、スカートを短くしてみようが、全く無反応の朴念仁だ。同じく王子を愛するものとして、彼に同情するところが無くは無い……。

しかし、その鈍感のお陰で、王子がいまだに禁断の道に目覚めてはいないのも確かだ。このまま何とかエンディングを迎えて欲しい。そう思っていた矢先、事件は起こった。

学園では最後の試験期間が終わり、長期休暇に入った生徒たちは、ほとんどが実家へ

と帰ってしまった。あの黒髪も例外ではないはず。その思考が油断を誘った。

「おや、ちよつと忘れ物をしてしまった。取りに行つて来るよ。すぐに戻るから」

「はい。転ばないで下さいね」

「ははは、子ども扱いしなくても大丈夫だよ」

王子はそう言うのと、男子寮へと走っていった。王子の公務に関わり、ロザリアと王子は他の生徒よりも寮を出るのが遅くなっていた。既に夕方だったが、王子は中々戻つてこない。徐々に不安が募ってくる。

「……まさか、あの男が!」

あの男が、王子を襲っているのでは？ 辺りが薄暗くなろうかという時、ロザリアははたと気付いて、男子寮に向かって駆け出した。

——王子!! どうかご無事で……!!

人気の無い学園の敷地を、悲痛な顔をした一人の少女が息を切らせて走る。

——ああ、もう王子は奴に、男同士の良さを徹底的に仕込まれてしまった頃かしら。

ロザリアは走りながら思った。

——最初は激しく抵抗しながらも、段々と快楽に逆らえなくなつた王子が、最終的にはあの男に取りすがつて「僕はもう君無しでは生きていけない」とか言つて、あの男はあの男で鬼畜な笑みを浮かべながら「じゃあ——今日から王子は、俺の奴隷ですからね」

なんて言っている頃かしら。

王子の身を案ずるあまり、その胸は張り裂けそうだ。

——大体王子って、優しいんだけど隙が多くて、どう見ても誘ってるっていうか、完全に受けよね、あれは。そう言えばこのゲームのベストエンドって、王子が国民の男全員の（性的な）玩具になるってやつだったけど、その何がベストなのよ！ 誰にとつてのベストなのよ!? 嫌だよ！ そんな国!!

校舎を過ぎると、その視界に男子寮の建物が入る。

——そう言えばさ、私たちって16歳だけど、「この作品の登場人物は全て18歳以上です」ってやっぱり嘘だったんだな。制作会社め!

多少の雑念は入っている気がするが、それでもロザリアは王子を思いながら必死に走った。人気の無い男子寮に忍び込み、王子の部屋を目指す。

階段を上がると、王子の部屋の前には、柄の悪い筋肉質の男が立っていた。あの男が用意した見張りだろうか。

「……—なんだてめ、え?」

廊下を走ってくるロザリアに気付いた見張りは、すぐんだ声を上げようとしたが、次の瞬間にはロザリアは男の背後を取っていた。そのままチヨークスリーパーで男を絞め落す。

——こんな所で転生者としての知識が役立つとは。完全に失神した男を床に転がすと、扉に耳を当てて中の様子を覗いた。

「——！！」

男の声と、抵抗するような物音。まだ王子の貞操は無事のようにだ。しかし扉には内側から鍵がかかっている。

ロザリアは小さく舌打ちすると、その美しい髪からピンを引き抜き、鍵穴に差し込んだ。ものの十秒とかわらず鍵が開く。——またも転生者としての知識が役立つた。

扉を蹴り開け、王子の部屋に侵入する。ベッドの上では、まさにあの男が王子を組み敷いている真つ最中だ。

「くっ、またお前か!! いつもいつも!!」

情事を邪魔された男は、ベッドから降りると殴りかかってきた。その突きを外し、ロザリアの拳が男の鳩尾に突き刺さる。——これも転生者としての知識が——まあそれはもういいや。

くの字に折れ曲がり、腹を押さえながら後退する男。追い討ちをかけて放たれたロザリアの鉄山靠が、男を窓の外まで吹き飛ばした。

◇

「か、彼は大丈夫!?　ここって三階だよね!？」

猿ぐつわをはずすと、王子は歓喜に満ちた声を上げた。

「大丈夫ですわ。下は並木ですし、手加減もしました」

「そういう問題なの!？」

「……………クリス様、ご無事で良かったです」

「……………ああ、うん。ありがとう。ロザリイのお陰で助かったよ」

ロザリアの涙ぐみながらの言葉に、王子も優しい表情で感謝の言葉を伝える。

「心配をかけてしまったね。ごめん。……………おっと、ははは、こんな格好では締まらないな。ロザリイ、すまないが縄を解いてくれないか？」

「……………」

「どうしたんだい、ロザリイ?」

涙をぬぐって改めて見たが、王子は両手両足をベッドに拘束されている。普段は綺麗に整えられた髪が乱れ、シャツの前がはだけている。ズボンのベルトも緩められ……………えらく色っぽい格好だ。

——じゅるり。

「え?　なんだいじゅるりって」

そうよそうよ、何でこんな簡単なことに気付かなかったんだろう。

——こういうのは早い者勝ちよね。王子に隙が有り過ぎるのがいけないんだから。

「え？　ねえロザリイ、何でベッドに登ってくるの？　笑顔が怖いよ？　ちよ、ちよつと

？」

王子に馬乗りになったロザリアは、優しく微笑むと、するりとドレスの紐を解いた。



もうすぐ新学期だ。今日は二人でピクニックにやってきた。ロザリアは満面の笑みを見せながら、王子と並木道を歩いている。この年度が終わって学園を卒業すれば、すぐに二人の結婚式だ。これが笑わずにいられようか。

王子に不敬を働いた罪で、あの黒髪は学園を去った。しかし処刑されなかっただけ、彼にとつては儲けものだろう。——やはりああいうことを行うには、両者の同意が無くてはならない。

これで全てののフラグはへし折れた。お兄様もお見合いで気が合う女性を見つけたというのだし、ロザリアにとつては万々歳、順風満帆の毎日だ。

「クリス様！　良いお天気ですわね！」

「ああ、そうだねロザリイ。——あんまりはしゃぐと危ないよ」
「大丈夫で——きや」

強い風が吹いて、ロザリアの帽子が飛ばされる。

「ははは。だから言つたろ？ 今取つてくるから、そこで待つてて」

「はあい」

——いやあ、青春してますわよねえ、私たち。

ロザリアがそんなことを思いながら、目をつぶつてうんうんと頷いていると、大きな物音がした。

「大丈夫か？ ん？ 君はもしや——クリス王子？」

「え、ええ。——あ、そう言うあなたは、隣国のガイウス皇太子ですか？」

「……ああ。来年度、君の通う学園に留学することになったんだ。……よろしく頼む」

目を向けると、王子と赤毛のイケメンが話している。王子が持っていたアイスクリームが、べつたりと王子の顔や身体に張り付き、白い線を引いている。ごくりと喉をならす赤毛。尻餅をついた王子を助け起こす赤毛の瞳には、その髪色にも似た明らかな情欲の炎が宿っており——つておい。

ロザリアの中に、再び前世の記憶が蘇った。

——『狙われた王子2く隣国の王子を婚約者から寝取る。結んでよ、俺との同盟関係

』

——今、続編の幕が上がった。

「続くんかい！」

—— t o b e c o n t i n u e .

鬼畜度MAX

公爵令嬢のロザリアには悩みがあった。彼女には、前世の記憶が備わっている。その前世の記憶によれば、今いるこの世界は、ある乙女ゲームの世界とまったく同一なのだ。このゲームのヒロインは自分ではない。彼女はいわゆる、プレイヤーの目的達成を妨害する、お邪魔キアラだった。いわゆる悪役令嬢。

しかしただの乙女ゲームならば、彼女がこれほど悩むことは無かったかもしれない。そう、この世界には一つ問題があったのだ。

その問題とは何か。それはこの作品のヒロインを見れば、すぐに理解できる事だった。

「そういえばロザリア、クリスが君を晩餐に招待したいと言っていたよ」

ロザリアの兄、ラインハルトが言っているクリスという人物がこの世界のヒロインだ。しかしながら、ロザリアはクリスと特に仲が悪いとか、いじめていると言うわけでは無かった。むしろ逆である。

「お前たちは婚約者どうしなんだから、誰にはばかることも無い、行っておいで」

クリスはロザリアの婚約者だ。そしてこの国の王子でもある。——そう、クリスは男

性だ。しかし驚くべきことに、彼は、この世界におけるヒロインでもあるのだ。

この世界の元となったゲームは、一国の王子クリスを中心に繰り広げられる、男同士の性の饗宴——すなわち、18禁のBLゲームだった。題して、『狙われた王子』シリーズ。このゲームの主題は、よりもよって婚約している王子を婚約者から略奪する、いわゆる「寝取り」であった。

ロザリアはこの世界にとつて完全なる悪役だが、しかし絶対必要な存在でもあった。何せ彼女がいなければ、「寝取り」は成立しないのだから。

それを思い出したロザリアは、このくそつたれな世界に反抗するため、そして愛する王子の貞操を守るために、今日まで東奔西走してきた。

東に王子に媚薬をもる鬼畜眼鏡教師がいれば、行って叩きのめし、西に王子によって性の芽生えを覚えそうな少年がいれば、行って女の子の方がいいぞと言い、あらゆる方法で王子の立てるフラグをへし折ってきた。

「そうですね、そうしますわ。王子にお返事を出さないと——」

その甲斐あって、王子とロザリアの健全な交際は続いている。フラグさえ立たなければ、王子はその道に目覚めないのだ。

「ああ、そうだね。召使のジェルマンに届けさせよう」

「ダメです、エミリアに届けてもらいます」

「え、なぜだい？ どうしてわざわざ……？」

兄の言葉を、足下に否定するロザリア。おや、何かまずいことを言ったかなと、ラインハルトは首をかしげる。メイドのエミリアより、男のジェルマンの方が、配達には適役だろうに。

「ジェルマンが、王子に手を出す可能性がありますから」

「……え？」

「ですから、郵便を届けたジェルマンが王子に会うと、フラグが立ってしまうのです」

「フラグ……？ ロザリアは何を言ってるんだい？ ああ、だったら私が届けてこよう。

王城に寄るついでもあったことだし——」

「ダメです。お兄様まで、そんなに王子とフラグを立てたいのですか!？」

「え!?! だからフラグって何？」

ラインハルトにとって、最近の妹の奇怪な言動は頭痛の種だった。事あるごとに「前世の記憶が——」と訳の分からないことを言い、突拍子もない行動にでる。

また、妹はなぜか、婚約者であるクリスマス王子に近づく男に対して、非常に厳しい。もしこれが、王子に女性が近づくことを嫌うのであれば、若い娘の嫉妬として、まだ苦笑して受け流すことができたかもしれない。

しかし、この妹の奇行のために、彼は去年留学までさせられたのだ。帰ってきたら

帰ってきたでお見合い三昧。それはまあ公爵家長男として必要なことと許せたが、あまり度が過ぎるとため息もでる。

「はあ、意味の分からないことを言っていないで——」

「お兄様が私の手紙を持った状態で王城に行くと、25%の確率で会話イベントが発生し、『ライ×クリ』ルートへのフラグが立ちます。さらに好感度が一定以上だと王城で一晩泊まるように引き留められ、浴場で湯浴みをする王子と遭遇する追加イベントが発生します。その時お兄様の鬼畜度が20ポイント以上蓄積されていると、王子の濡れて火照った肌に欲情したお兄様が我を忘れて王子に襲い掛かるシーン差分が見られるのです——さあ、これでも王城に行きたいとぬかすのですか!?!」

「いや、襲わないよ!?! あいつは私の後輩で、ただの友人だからね!?!」

「ただの友人だと思っていた王子に性的な興奮を覚えている自分に気づいて、その夜はかつてないほどに燃え上がるのですね」

「何を言ってるんだよ!?! 言いがかりだよ!?! そもそも『鬼畜度』ってなんだよ!?! そんなものが私に蓄積されてるの!?! 怖いんだけど!?!」

ロザリアは手元にある謎の冊子をペラペラとめくりながら、ラインハルトの質問に答えた。

「鬼畜度はマックス100まであるパラメーターで、これが貯まると色々イベントが起

きます。今お兄様は15ポイントですね」

「マジか……、20ポイントまで結構ギリギリじゃないか……」

「二度上がったら下げる方法は無いので、ご注意下さい」

「しかも結構厳しいしき……。……はあ、大体ロザリアは、どうしてこう未来のことを、見てきたように話すんだい？」

偏った情報が多いが、確かにロザリアの言うことはよく当たる。気味が悪いほどに。——まさか、本当に前世の記憶などというものはあるとでもいうのか。

「お兄様もご覧になりますか？　これから起きることは、おおむねここに書かれています」
ロザリアが、手製と思しき分厚い資料をラインハルトに差し出す。表紙に丸文字で『攻略本』と書かれた本のページをめくるラインハルト。そこには様々な出来事が、日記のように書かれていた。

「これは何だい？　ロザリアの日記かい？　何々——○月×日　皇太子と王子が街で出会う。『それは網タイツですか？』と答えて鬼畜度+2　調教度+4　△月○日　狩猟中に嵐に遭う王子。騎士団長の好感度50以上の時、森の小屋でスチルイベント　騎士団長×王子　後ろから。——いや、違うな、日記じゃないな。黒魔術の書か何かな」
ラインハルトには理解できなかったが、そこに書かれた内容から漂うオーラは、日記と言うにはあまりにもおぞましいものだった。ここには将来王子が遭遇する可能性の

ある出来事が、ロザリアの手によって列挙されていた。

ラインハルトの言も間違っていない。この本はある意味、強力な腐敗の黒魔術によって構成されていると言える。ロザリアが元いた世界では、このような魔術書が巷ちまたに氾濫していた。

「この、12月なんか、皇太子に王子が妊娠させられるって書いてあるんだけど……」

ロザリア、いいかい？　そもそも男は妊娠しないんだ」

「はんつ。お兄様、遅れてますのね！」

妹の性知識のなさを指摘したつもりのラインハルトだったが、鼻で笑われた。やれやれと両手を広げ、あきれたように首を振るロザリア。

「今日び、出産シーンの一つくらい無いと、ニーズに対応できないのです。その程度のこととで驚いていたら、この業界では身が持ちませんよ？」

「業界ってなんだよ……」

業界は業界だ。ちなみに作者がこれを書くためにBL+ジャンルとかで検索したら、結構痛い目にあつたから気をつけよう。

「とにかく王子を狙う男性は多いのです。私の研究によると、どうやら王子は生まれつき、近寄る男を鬼畜攻めにしてしまうフェロモンというか——魔力のようなものを大量に発散しているようなのです。チートですわね」

「何その能力……」

しかしとりあえず、あんまり王子とは会わないようにしよう。そう思ったラインハルトだった。

中年庭師×貴公子

「……ん？ これは」

ある日ラインハルトは偶然に、妹のロザリアが『攻略本』または『アルティマニア』と呼んでいる彼女お手製の分厚い冊子を見つけた。

妹のプライバシーに関わる事でもあり、しかもこれは恐らく呪いの書だ。見てはいけないと思ったが、彼はどうしても好奇心を抑えきれなかった。

恐る恐るページを開く、冒頭の方には、以下のような内容が記されていた。

★登場人物紹介★（byロザリイ）

ガイウス皇太子（18）：

隣国の皇太子。俺様暴君系のイケメン。遊学に来た学園で王子を見初めた。王子を我が物にするため皇位につき、王国を侵略する。

王宮の天才魔導士エメリツヒ（23）：

眼鏡で白衣のマッドサイエンティスト系イケメン。魔術を駆使して王子をおもちやにしようとする。特技は触手の召喚。

貴公子ラインハルト（18）：

腹黒笑顔の知的なイケメン。学園の生徒会長ポジション。ロザリアの実兄。

王子を狙っている。

魔王アスモデウス（7518）：

学園の地下に封印されている魔王。人類の滅亡と王子の支配をもくろんでいる。

剣技教官ドルフ（31）：

筋肉モリモリマッチョマンの変態。剣の稽古と称し、たびたび王子にボディタッチをする。やたら王子に筋肉を付けさせようとする。

当然王子を狙っている。

庭師サムソン（40）：

笑顔がどう見ても不審者な、肥満気味の中年。常に汗まみれでタンクトップを着用している。

やはり王子を狙っている。

この他にも大勢の人物が列挙されている。これを見て、ラインハルトの頭痛がさらにひどくなった。もはや自分の名前が当たり前のように記されていることには、あえて突っ込むまい。

「見てしまいましたね……」

「うおっ！ ロ、ロザリア！ どこにいたんだ」

背後からホラーな感じで現れたロザリアが、すかさず『攻略本』を兄の手から取り上げる。

「これはまだお兄様には早すぎます」

いや、全人類にとって早すぎる気がする。宇宙的恐怖を召喚するための呪物でも、これほど禍々しいオーラは放つまい。

ともかくロザリアは攻略本を閉じてテーブルに置くと、すまし顔で椅子に座った。

「い、いや、見過ごすことのできない情報が幾つか含まれていたんだが——。え？ ガイウス皇太子ってあの？ この国を侵略するの？ それに魔王って何？ そんなものが学園の地下にいるなんて、聞いてないんだけど」

「魔王は隠しキャラですから」

「そんなもんは永久に隠しとけ!!」

「まあその辺のキャラはいいのです。もう対処済みですから。魔王は私が倒しましたし」

「ええ……、何それ……。で、ではガイウス皇太子は？ まさか本当とは思えないが、帝

国がこちらに攻めてくることがあるというなら、父上にも相談しないと——」

「それも問題ないです。あと数日あれば、私の訓練した特殊部隊が、帝国の首都を墮とし

ますから」

「まじで?」

これも前世の経験が生きたから、できたことですからねと微笑むロザリア。我が妹は、前世で一体どのような人生を送ってきたというのか。

「それにこれ——サムソンって、うちの庭師のサムソンのこと? ひどくない? ロザリアは彼に恨みでもあるのか?」

「彼は健康的なシヨタだったころの王子に一目惚れして以来、王子を狙っているのです。この屋敷に庭師として雇われたのも、間接的に王子に近づいたためです」

「な——いや、いくら何でも言い過ぎだろう! そんな偏見でものを言うなんて、長年我が家に尽くしてくれている彼に対して、申し訳ないと思わないのか!」

ラインハルトが敢然と抗議する。ここまで他人を悪しげまに言うとは……。そうではなくても最近の妹の言動は度が過ぎていて、ここは兄として、何としてもたしなめなければならぬ。

兄の剣幕に対してロザリアはひるんだ様子もなく、優雅に紅茶をすすりながら、ぱちんと指を鳴らした。

「お嬢様、お呼びですかい?」

「え、な、なんだサムソン、どこにいたんだ。え、そのぱちんって鳴らすやつ、お前たち

にはそれで通じるの?」

大男がのつそりとして入って来た。ラインハルトはうろたえている。

「ではここで実際に、ゲストとして庭師のサムソン君に来てもらいました。サムソン君、質問です。正直に答えてください。……あなたの好みの男性は?」

「ぴちぴちの美少年ですね。10〜12歳くらいが、肌にも張りもあつて最高です」

サムソンがさわやかな笑顔で答える。

——いや、さわやかと言うのには語弊があつた。この笑顔の男が公園でベンチに座っていたら、間違ひなく不審者として通報されるだろう。子供を遊ばせている母親は、そろつて家に逃げ帰る。そして周囲の小学校に、生徒を集団下校させるように通知が出る。

だが少なくとも、その目に偽りは無い。彼の目は、真実を語っている漢おとこの目だ。

「ちよつと待てえい!! サムソン!! お前は何を当たり前に答えてるんだよ!! 何でお前はいきなり、自分の危険な性的嗜好について告白してるんだよ!!」

「次の質問です」

「聞けよ!!」

「王子は今年で17歳です。あなたの好みとはマッチしないようですが?」

「いやあ、そこはあれですね。怪しい魔術師から相手の歳を10〜12歳にする薬を

譲ってもらったので、それを使って楽しみます」

「なるほど」

うんうんと頷くロザリア。

「何納得してるんだよ！　そういう薬って違法じゃないのか!?　そもそもそんな薬ってあるの!?!」

あまりにも効果が限定された薬に、ラインハルトは驚きを禁じ得ない。

「まあ、別に17歳でもいけますがね」

「そんな事は聞いてねえよ!!」

「最後の質問です。——私の兄を見て、どう思いますか?」

「だから何を質問してるんだよ!?　サムソンの好みは王子なんだろう!?　だったら私に興味なんかあるわ……け…………。おい、どうしたんだよサムソン。……こつち見るなよ。……何とか言えよ!」

沈黙したサムソンがじつとりとした視線で、舐め回すようにラインハルトを見る。だんだんと鼻息が荒くなり、目が血走ってきた。紅潮する肌に、首筋を流れる汗。

「——いいですねえ。滾たぎりますよ」

じゅるりと舌なめずりをするサムソン。

「はい、どうもありがとうございます。お帰りいただいて結構です」

「ウツス、お嬢様」

頭を下げて、のそのそと部屋を出ていくサムソン。

「おいちよつと待て!! 最後なんつった!!」

『ウツス、お嬢様』ですわ」

「その前だよ!! 滾たぎるって何!? どういう意味!? 何が滾たぎるの!! 家の中に不審者がいた!!

誰か!! 誰か来てくれ!! 助けて!!」

「お兄様、彼を責めてはいけません。彼もニツチな嗜好を持った淑女たちのニーズが生み出したキャラクター——すなわち、ある意味で犠牲者なのです」

取り乱す兄の肩をぽんぽんとたたき、そう諭すロザリア

「その前に、このままだと私が犠牲者になるよ!!」

「ですが今はそんなことよりも、もつと優先すべき事がありますの、お兄様」

「いやー、私にとつてはこれが最優先すべきことだと思ふなあ。お兄様は今、かつて無いほどの危機感を抱いているよ? ロザリア」

しかしロザリアは聞いていない。

「とにかくこれでお分かりになりましたかしら。モブとは言え油断はなりません。この国の男は、全てクリス王子を狙っていると断言していい」

私から王子を奪おうとするものは、誰一人許しません。そうつぶやくロザリアの瞳に

宿っているのは、まさに阿修羅。

「まあ、それはそれとして、私は愛しい王子様とのデートに出かけてきますわね」

今夜は帰ってこないかもしれないかもしれませんが、ご心配なく。そう言って、高らかにおほおほと笑いながらロザリアは出て行った。

ロザリアが去った後、ラインハルトは一人部屋に取り残された。首を振ってつぶやく。

「どうしよう……。妹が分からない……。——ひつ、今窓の外にサムソンがいたぞ!?

こつち見てなかったか!? 怖あ……」

自分もだいたい妹に影響されているのかもしれない。しかし、いつから彼女はあんな風になってしまったのか。

「……ん? 何だ、また忘れてるじゃないか」

悩みながらも、ラインハルトはロザリアが置いていった『攻略本』を手に取った。そしてまた興味本位で、あるページを開いた。

「むー! これはサムソンに関する記述か」

まさにそうだ。この呪いの本がこれから起きることを予言するなら、逆に言えばこれを参考にすれば、自分はサムソンの魔の手から逃れることができるのではなからうか?

「何々、サムソンがお兄様ルートに進むには、鬼畜度をマックスにする必要があります

……」

鬼畜度設定……生きていたのかとつぶやいて、ラインハルトは次のページを見る。鬼畜度は100までであるとロザリアは言っていた。なら結構余裕があるじゃないか。

「なお、キーになるのは『ロザリアとお兄様とサムソンのティータイム』イベントです。サムソンがお兄様の前で性的嗜好を告白するイベントが起こると、サムソンの鬼畜度が83上昇しま——はちじゅうさん!? しかもこれってさっきの会話かよ！ そんなに重要なイベントなのあれ！ ……ん？」

一人でツツコミを入れているラインハルトは、物音を聞いた。背後でロザリアが出て行った扉が、ぎぎぎと開く音がする。

振り返ったラインハルトは、そこにサムソンの笑みを見た。